

## 「ちょう」迷惑

～遺棄放流によってもたらされた悪影響の「分かりやすい事例」～

芥川緑地資料館（あくあびあ芥川）

花崎 勝司

2011年7月16日午前9時頃、芥川緑地資料館（以下、当館）付設の池（約500㎡、浅場水深約15cm、深場同約60cm）で飼育しているコイ *Cyprinus carpio* が8個体（全長約40～50cm）死亡しているのを確認した。これら斃死個体の体表にはエラオ類が懸着寄生していた。この時、コイ各個体における寄生個体数などについては計数しなかったが、撮影画像の1枚から行った計数により、1個体の腹鰭前方腹部に幼体から成体までと考えられる約30個体が確認された。これらエラオ類寄生に対する処置としてトリクロルホンを主成分とした水産用医薬品を散布した。しかし同年8月26日にもコイの死亡が再発した。1個体の体表には前記したエラオ類が同様に寄生しており、これらの一部を5%ホルマリン溶液で固定・保管した。このエラオ類標本は、広島大学大学院生物圏科学研究科の長澤和也教授により、チョウ *Argulus japonicus* と同定された。

チョウはコイや「キングヨ」などの外部寄生虫として旧来から広く知られており、その形態、生態、生活史、病害などに関して多くの研究が行われてきた。本種は、宿主の体表に懸着寄生し、吻部の前方にある刺針をその体表に突き刺し、毒液を注入し吸血する。また懸着刺激は魚体に強いストレスを与え、吸血時に形成される傷口が病原細菌の感染門戸ともなり、重度・多数寄生ではこれら直接的・間接的要因により宿主を斃死させうると考えられている。

当館で発生したコイの大量斃死は、チョウの寄生により直接的、あるいは間接的病害により引き起こされたものと推察された。当館ではこれまで、本種の発生と蔓延により魚類が斃死した例はなかったが、本事例は遺棄放流された「カワゴイ（鱗がほとんどないコイの品種）」によって、その宿主と共にもたらされた可能性が非常に高いと考えられた。すなわち、当館では池の完全落水による池掃除を定期的に実施しており、その際にはコイの移動と個体数カウントも同時に行っている。今回の大量斃死の発生日に直近の池掃除実施日は同年6月19日であり、この時点では前記した形態的特徴を有するカワゴイは確認されていない。したがって、この掃除日以降、何者かによりチョウのキャリアともいえるカワゴイが遺棄放流され、その結果によるチョウ蔓延と大量死が引き起こされたと考えるのが妥当である。

今回の事例は、魚類の遺棄放流により、その個体と共に病害寄生虫がもたらされ、そのことにより、「その水域」に生息していた魚類が病害により斃死する、もしくは重篤な弊害をもたらすという懸念を的確に示したものである。

なお、大阪府におけるチョウの標本に基づく記録は本件で2例目であることも判明した。このことは「旧来から広く認識されているもの」であっても、それが証拠標本とともに保管されていることがいかに少ないのかを如実に示すものとなった。